

和歌を紡いで五十年 —— 佐藤正子「御蔭様」の精神

—— 「求道」は「農婦われ」と共にあり ——

千葉 貢

（一）はじめに

歌和を紡いで五十年 —— 佐藤正子さん（雅号・有眠）は大正十二（一九二二）年八月二十一日、群馬県安中市（旧、碓氷郡東横野村大字下間仁田）の生まれで、現在、吾妻郡東吾妻町五町田（旧、東村）在住の歌人である。三十代の半ばから短歌を詠み始め、やがて俳句にも興ずるようになり、合わせながら半世紀余りの時を重ねて来たという。時に短歌を、時に俳句を詠む —— そのどちらもが和歌（大和うた）であるゆえに、表題の「和歌」に「うた」という振り仮名（意味仮名）を添えた次第である。共に短詩型と言われながらも韻律数に違いがあり、それでも「和歌」という「うた」に違いはない。

「うた」は心情の真実な告白であるという。唐木順三は、「想像は知性よりも先、情熱は反省よりも先である。美は真よりも先であり、形式論理よりも、詩的論理が先である。韻文は散文に先立ち、歌うこと

は語ることに先立つ。感情と想像を以て歌う詩人は、知性と論理をもつて考える哲学者よりも先である、とともに高い。」という論理的な説明に教えられたのだが、「詩」もまた同じく「和歌」なのだから、「詩人」を「歌人」や「俳人」に置き換えても、意味仮名として添えた「うた」を詠み、歌うことには変わりはない。中西進も表現様式として「かたる（語る）こと」と「うたう（歌う）こと」を挙げている。つまり、「かたる」とは「騙る」ことだと言ひ、現代でいう「だます」こと、「嘘をつく」ことなどに用いる、それと同じ意味であるという。いわゆる「物語」とは初めから虚構を性格とする創作なのだ、という。これに對して「うたう」とは「訴う」だという。我が心情を相手に訴える表現様式が「和歌」だと考えられるという、語源を踏まえての指摘に教えられたのである。従って、私たちもまた韻律上の技巧に苦心せざるを得ないとしても、率直に「うたう」べきであろう。自らの素朴な時々刻々の心情を正直に「うたう」以外に、自らの資質や能力を引き出し、具体的に創造させることは出来ない。自分を知る —— その発見のた

めにも「和歌」はうたわれるべきなのである。その先駆者の例として、次の一首を紹介したい。

血に染めし歌をわが世のなごりにてさすらひここに野に叫ぶ秋

これは石川啄木の「短歌」である。この短歌は明治三十五（一九〇二）年一月、新詩社刊『明星』五号に初めて掲載されたものである。投稿に用いた筆名は「白蘋」であった。時に岩手県立盛岡尋常中学校（現在の同県立盛岡第一高等学校）の五年生、満十六歳であった（明治三十三年、十四歳にして与謝野鉄幹主宰「新詩社」の社友になっていた）。在学中の学業は文学への情熱が高じて怠りがちであり、加えて下宿先の近隣に住む堀合節子（後に妻となる）との恋愛によって学校生活そのものの破綻を来すことにもなる。『明星』誌上の登載を見届けるや間もなく、あと半年余りでの卒業を待たずに退学届を提出し、文学でもって身を立てるべくして同三十一日の早朝、家郷をあとに上京したのであった。それ以降の、清貧に甘んじ苦節に喘ぎ、流浪のなかでうたわれた「短歌」の数々や、薄命の生涯（明治四十五（一九一二年）四月十三日逝去。享年、満二十六）については今も猶、多くの人々に知られている。そこで私は、「血に染めし歌をわが世の……」の一首が文学への決意表明にして、青春の気負いを秘めた心情の告白であり、その後の人生を決定づけた「資質」の発露や具現であったと言いたい。やがて出郷後の暮らしや生涯を象徴するような、「歌は

私の悲しい玩具である」という一文のもとでまとめられた、歌集『悲しき玩具』（明治四十五年六月二十日、東雲堂より刊行）のなかから、次の一首を引いてみた。

新しき明日の来たるを信ずといふ

自分の言葉に

嘘はなけれど——

啄木の「うた」は一〇〇年余りの時を経ているにも関わらず、今でも共感を覚えるのだが、どうだろう。啄木は「嘘はなけれど」と接続助詞のままにとどめ、「明日は来ないかもしれない」との疑問や諦観、未練などの含みをもたせ、読者に判断を委ねている。それは「嘘はなけれど」と一抹の期待を秘めながらも自己を卑下し、自嘲するかのように逆接のまま「訴えた」のだが、果たして病を得たまま「新しき明日の来たる」ことはなかった。いや、その後も「新しき明日」は常に時を重ね、「光陰、矢の如し」「歲月、人を待たず」の通り、私たちがの出会いが待たれていたのである。

（二）「和歌」に情熱を込めて

私たちがこの出会いが待たれていた—— 私たちのなかの一人が佐藤正子さん、この人である。佐藤正子さんは永年にわたって「和歌」

を詠み続け、数々の「和歌」を書きつけて来た歌稿を整理し、遂に『歌集 詠はめや 草屋住まひ』(平成十四年六月二十六日、上毛新聞社刊。全二七三頁。一二八〇余首)と題してまとめ、世に問うた。私も拝読する機縁に恵まれ、感服するに及んで一考をものする次第である。佐藤正子さんの確かな力量や繊細な感性、そして深い教養に裏づけられた多くの「和歌」のなかから何首か紹介し、共に鑑賞や啓発の縁とすべく思いを込めて綴りたい。

佐藤正子さんはうたい続けて来た。それは自らの来し方行く末に万感の思いを寄せ、その身を愛惜するあまりの絶唱の数々である。先ずはじめに次の「和歌」を紹介したい。

農婦とし唯凡々と老いづけり 且且塩となり得たりしか

人は始めから「農婦」として生まれて来るのではない。生きて「農婦」にも「歌人」にもなり得るのだが、佐藤正子さんは八十歳を越えて、尚も「なり得たりしか」と疑問を抱き、自制的に自責を課している。ここに「唯凡々と老いづけり」と抑止的な自重、自省、自肅を重ねながらも「心丈夫」や「気概」に溢れ、「気骨」に富む心情を読み取ることができる。「塩」は「塩が浸む」という慣用句に教えられるまでもなく、「世間のつらさが身にしむ。世を渡る経験を積む。所帯じみる。」⁽³⁾ ことなどに加え、「一家の主婦としての「塩加減」(采配)ぶりについても想起されるのだが、どうだろう。だから私は、この一首

は「農婦とし」「且且塩となり得たりし」重厚な思いや人生を凝縮した、まさに「農婦」に徹してきた佐藤正子さんの絶唱であると思う。さらに、佐藤正子さんは自制しながら、次のようにうたっている。

農婦の域出づることなきわが一生造花にも似て散るも叶はぬ

農婦われ古稀を越えたり愛に関はる言葉ひとつを交はずなく過ぎ
農婦の域出づることなきわが一生造花にも似て散るも叶はぬ
という「和歌」のなかには、一抹の未練や切ない哀れを含みながらも気概が見え、心丈夫に自責を貫いて来たという真実が読み取れる。一生懸命とは、こうした言動をいうのである。だから、ここには弱冠十六歳の啄木がうたつたような「さすらい」はない。啄木の「短歌」は、これからの「さすらい」を気負い、時勢を甘受した浪漫主義の典型である。その違いは生い立ちや年齢、性別、時世などの影響もあろうが、結局は生き方や心がけに起因するものである。佐藤正子さんが「農婦われ古稀を越えたり」と「うたう」、心情は、永年にわたり天を仰ぎ、大地を耕し、踏みしめて来た足跡にして、地道に培ってきた土着の魂を代弁したものであろう。「農婦われ」は、天地の不二元、身土不二のなかに生きて来たという「可惜」⁽⁴⁾ 命を自覚しての複合語であり、造語であろう。それはまた、「土」と共にあって「和歌」の道にも努めて来たという感慨であり、自負心に違いない。その思い入れを証左するかのよう、

土に生き土に還らむ朝なさな老いの仕事の庭草を抜く

という一首も忘れがたい。確かに「土に生き土に還らむ」との告白は、運命に準じて来た者の泰然自若にして達観であろう。だから「朝なさな」（朝な朝な）と平凡な繰り返しのように見える。「老いの仕事の庭草を抜く」仕草や手作業と言えども、決して単純にして単調な積み重ねに伴うものではないのである。そこには、「老いの仕事」として受容するに至った長い年月があり、熟練した技（わざ）を獲得し、辛抱強い「土」の精神や、「土」の思想が息づいている。そうした「忍辱」の過程を培いながら、身をもつて受容して来た、人生という物語の創造を見逃してはならない。それだけ日常の責務を見事に果たしてきたのだ、ということである。

「忍辱」とは、「へ仏」六波羅蜜の一つ。もろもろの侮辱・迫害を忍受して恨まないこと。（中略）へ忍辱の袈裟へ忍辱の心があらゆる外障から身を守ることを、袈裟にたとえていう語。後には、単に袈裟のことをもいう。⁽⁵⁾との説明は、仏教の趣旨に基づくものであり、布教の困難を克服するための教義でもあった。僧侶が身に纏う「袈裟」は、その象徴であり、別名を「法衣」「功德衣」「無垢衣」「忍辱鎧」などと言われる所以でもある。——この上で私なりに理解したことを述べたい。

私たちは、凡夫であるゆえに「もろもろの侮辱・迫害を忍受して恨まないこと」を極めるのは難しい。それこそ煩惱の浄化に努めるべく

して仏道に勤しみ、永年の修業が必要であろう。例えば、すでに宮澤賢治は、「世界がぜんたい幸福にならないうちには個人の幸福はあり得ない」自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する／この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか⁽⁶⁾という見解を示し、詩や童話などの創作活動にとどまらず、多種多様な実践に挑み、試み、そして数々の業績を残した。賢治は、「われらは世界のまことの幸福を索ねよう／求道すでに道である」と訴え続けながらも、志半ばにして倒れた。即ち、「忍辱」の道に徹しながら「忍辱」の生涯であった、と言えよう。それでも「詩人は苦痛をも享樂する／永久の未完成これ完成である」という「結論」からも伺えるように、「子曰、当仁不讓於師」（子曰く、仁に当たりては師にも譲らず。『論語』衛霊公第十五―三十六）、あるいはまた、「子曰、志士仁人、無求生以害仁、有殺身以成仁」（子曰く、志士仁人は、生を求めて以て仁を害することなく、死を以て仁を成すことあり。『論語』衛霊公第十五―九）にも等しく、賢治ほどの強靱さがなければ「忍辱」はもとより、「先づ人として人の道⁽⁷⁾」をも究められはしないだろう。そこで私は、「忍辱」について、次のように考えてみた。

つまり、外からの「もろもろの侮辱・迫害を忍受して恨まないこと」は果たし難いのだが、自らの目標や希望の実現のためには、必然的に努力の過程を伴い、自分の置かれた立場や条件、環境などを克服すべくして日々の時間に耐え続けるべき精神なのではないかと、無常迅速にして不可逆的な変化が著しく、不自由を余儀なくされるこ

との多い人生を思えば、誰もが日々「忍辱」を強いられ、容易に超えることのできない命題なのではなからうか。だから、私たちは浅知恵よろしく自省を忘れ、安易に「永久の未完成これ完成である」とばかりに、性急な「結論」や虚勢に陥りやすい。さらには、自由・平等・博愛の看板のもとで、近代的な自我の確立、個性の尊重、豊かな社会を目指して、などという甘言に等しい美辞麗句にして曖昧模糊とした新語や造語を知たり顔で多用したり、御為ごかしの「人生論」や「解説書」が流布したり、「自分らしさ」に拘泥するあまり、自虐的な自閉症に陥るといふ「共同幻想」を抱きやすくなるのも無理からぬのである。なぜならば言葉に対する自覚が希薄であり、言葉遣いを軽視する所以である。言葉が精神を創造する、という提言は、素朴な言動の蓄積であり、日々の習慣の大切さ、不断の心がけの大事などを裏づける真実であろう。ゆえに私は、「結果に至る過程に目覚めよ」とばかりに、「過程」の尊厳や習慣の大切さを強調したい。

(三) 「草屋」に包まれながら

今年八十六歳を迎える佐藤正子さん(旧姓・真下^{ましも})は、「忍辱^{にんじやく}」の時を重ね、自制や自粛、自省、自責などに心がけてきた人である。十九歳八ヶ月にて生家を離れ、現在地の他家に輿入れし(昭和十八年四月十六日)、それ以来嫁として、妻として、母として、さらには姑として、祖母として「農婦われ」を貫いて来たのである。「和歌^{うた}」は、

そうした日々の「過程」に伴う心情から引き出された、代理的な強化の反映であり創造である。その集大成のひとつが、『歌集 詠はめや草屋住まひ』(平成十四年六月二十六日、上毛新聞社刊)というところである。その冒頭には、「草屋の四季ごよみ」(五頁)と題する章立てのもとに、

超然と草屋を守る夫に副ひ粗朶^{そだ}の熾^{さか}もて餅を焼くなり
天明^{てんめい}の世の移築とふ茅屋^{ぼうぐ}に今を住み継ぐいろり焚きつつ

という順に収められている。冒頭の一首は、選者の武川忠一氏の推挙によつて特選の評価と采誉に輝き、NHKより放映されたという代表作である。「超然と草屋を守る夫に副ひ」という上の句は、「超然と草屋を守る夫」を称え、支えながら、作者自らもまた永年にわたつて「副ひ」続けて来たのだから、「超然」とでもいふべき信念が、「粗朶の熾」のように底力を發揮し、今も猶「餅を焼く」暮らしを継いでいる事実や伝統のなかで培われて来た、安心立命の情景をうたっていると思われるのだが、どうだろうか。冒頭に次ぐ「天明の世の移築といふ……」の一首もまた、同じような趣意と気概が読み取れる。「天明」という年号(一七八一〜一七八八)からして、時の事件や歴史を偲^{おも}ばずにはいられないであろう。

天明——そこで年表を繙くまでもないのだが、天明元年に上州(今の群馬県西毛地方か)や、武州(今の埼玉県秩父地方か)に百姓

一揆が発生し、同三年には浅間山の大噴火が起こり、その影響による冷害も加わり、「天明の大飢饉」（同二年〜七年にかけて）と呼ばれている悲惨な天災が甦ってくる。それ以来の「茅屋」（築三〇〇年ほどになるという。茅葺き屋根のことだから、これまでに何回かは茅の葺き替えを行って来たことであろう。最近では平成十六年一月七日〜同二月二十日にかけて、茅葺き屋根の修復や、三百年来の梁の取り替えを行ったという。このために信州の屋根屋職人が四十日間以上も泊まり込みで作業に取り組まれたという。詳細は、葺き替え作業の工程や進捗状況を写真と俳句でまとめた、『茅葺き屋根を葺き替える——

写真と俳句でつづる草屋のくらし』平成十二年五月十日、上毛新聞社刊を参照のこと）に、「今を住み継ぐいろいろ焚きつつ」ということである。それゆえに、風習や習慣などの伝統文化を身につけており、今では得難い、特異な教養の蓄積に圧倒され、教えられることが多いのである。

続いて四首目に掲げている、「火吹竹の吹き出し口よりおだやかに濃き息吹けば梢^{ほだひ}火生まるる」という一首もまた実景である。伝統的な「囲炉裏」のある暮らしは「草屋」のなかに含まれ、貴重な「茅葺き屋根」に守られて来ただけに、今でも象徴的な「草屋」「茅屋」を、住まいの家屋や屋敷の代名詞のように自称している。その「草屋」なり「茅屋」なりにまつわる家系については、次のようにうたっている。

「叶屋」の屋号掲げて天明よりこの草庵に棲み古り来たる

このことだから、幾たびかの屋根の葺き替えを経て来たとしても、「天明より」と教えてみれば、三百有余年もの歳月を重ねて来たということである。家系を遡り、先人に思いを馳せれば、遙か山脈^{やまなみ}の向こうに広がる浅間山が大噴火を起こしたときの影響や、「天明の大飢饉」をも克服し、後世の政変や時代の荒波に加え、近代化百年のあいだの日清・日露・日中の各戦争、太平洋戦争（第二次世界大戦）などに翻弄され、塗炭の辛苦にも耐えながら、「棲み古り来たる」という歴史を偲ばずにはいられない。政治という名のもとで強いらながらも克服し、今日に至らしめた事実をして「忍辱の精神」の具現であり、潜在的な伝統の地力という、底力であると言わずに何と言おう。暮らしの知恵を含めた「教養」にも等しい「伝統」の力は、決して「叶屋」と呼ばれて来た「草屋」のなかだけで培われて来たわけではないが、確かに「草屋」のなかのそこかしこで育まれたものに違いない。だから、

石臼に三本杵もて餅を搗く土間にひびかふ音のはなやぎ

と、うたわれているような「はなやぎ」も生まれる。それは「土間」という客人を接待したり対応したり、かつ物置き場や雨天の日などの作業場として活用される空間において、「餅を搗く」という協同（協働）作業によってもたらされるのである。その「はなやぎ」のなかには、「三本杵もて」なのだから、声を掛け合いながら交互に「杵」を打ち、加えて音頭をとりながら水を打つ人もおり、周りで声援をおくり、飲

声をあげる「族・やから」という人々もいることだろう。「餅を搗く」という習慣や所作、「餅」を伸ばし、切り、料理をして食べる、あるいは保存する、などの一連の手順や立居振舞い、所作、所行が、民俗の典型であり恩恵である。家系に限らない人々による継承の御蔭である。こうした暮らしや風習が伝統の力を培い、教養を育んできたのである。だから、「自分らしさ」にかこつけて出来合いの好みの食品を個別に購入し、個室で「孤食」を貪るような進歩的な食生活からは、佐藤正子さんがうたったような「はなやぎ」は生じない。つまり「餅を搗く」ときの「音」だけにとどまらない「はなやぎ」——これが伝統の力を培い、教養を育む要素であり、笑顔や歓声を生み出す暮らしの潤いでもある。「土間にひびかふ音のはなやぎ」は、一家の団欒や「田居」の情景を反映させ、描写した「和歌」である、ということを重ねて言いたい。

こうした「はなやぎ」の情景を描写する眼差しは、「草屋」の外にも向けられている。かつては養蚕のために開墾された桑畑に梅の木を植えての幾星霜、今や「梅林」に生まれ変わり、枝もたわわに実をつけ、「梅干し」づくりに余念がない。

梅林の樹下に憩ふひとときを目は見残しの梅さがしをり

梅漬けの時季めぐり来ぬ土の香と露をふむ紫蘇の葉

揉むほどに紫蘇のあく汁泡を生み素手染めあぐる泡のまんだら

などの「和歌」は、いずれも実景であり、実感であろう。私たちに、佐藤正子さんの生業が農林業なのだから、「梅干しづくり」や「梅漬け」など、当たり前の仕事のように思われるだろう。確かに、永年にわたって創意工夫を重ね、身をもって培い、習得してきた英知や技（わざ）。身体技法）、感覚などの独自性に満ちた香りが漂い、味わい深さも堪能することになるだろう。だが、温かい御飯に梅干しをのせて食べるまでには、「餅を搗く」と同様に、梅の木や土の手入れから始まって、いくつもの作業の工程を経て、何よりも「時季」が熟さなければ「梅干し」一つとて食べられないのである。言うまでもなく、「梅」自らが「梅干し」となって食卓に上るのではない、ということを知すべきであろう。「手間暇をかける」「手を煩わす」「手が込む」「手を借りる」などの慣用語ではないが、「手間」のかかる過程を、「手塩」にかけて積み重ねて来た結果が「梅干し」なのである。結果に至る過程をやり遂げることが、私の言う「忍辱」の精神であり、「忍辱」の過程を体得することによって伝統の力が培われ、教養も育まれるのである。それはまた身をもって「身を入れ」、「身を粉に」して「身（手）を尽くす」のだから、「身を投ずる」に等しく、「身を立てる」ことなのである。いずれも「手軽」なことではないのだが、決して「手抜き」をすることはない。

(四) 山里に時は流れても

「梅干し」「づくりが教養を育む——なぜならば、「こういうものを生み出す手仕事の熟練はただもう同じものを繰り返す無心を作る、というところからしか来ない。そうやって作られる日常品は、機械製品には決してまねのできない『味』と感覚の深さを湛^たえている。土地の素材を使った土地の工芸品(梅干し)とて然りであろう。引用者、注)は、まったく生活のためにあり、生活のなかで無雑作に使い尽くされていく。自然と生産生活との間に終わりのない循環がここにある。この循環こそ、実は人の生活の独立を根底から保障してくれるものだ。」⁽⁸⁾から、技(わざ)の向上と共に、英知を引き出し教養を蓄積し、文化を醸し出すのである。さらには、「梅」という生きものとの触れ合いや対話を通じて労り、慈しみ、思いやり、細やかさ、愛しさ、勿体ない、哀れなどの心配り、心遣い、気遣う心性も養う。心と技(わざ)が「梅干し」の味や香り、色などに反映され、決定づけて来たのである。その典型や代表的な例として挙げられるのが、懐かしさの漂う「おふくろの味」や「郷土料理」、地元^{ちもと}に伝えられて来た特産品の数々であろう。ところが、近年に至ると、

近代の機械産業は、こういう手仕事を古くて、効率の悪い、ほとんど惨めな生産形態として、どんどん駆逐していった。が、駆逐された

のは生産形態だけではない、物と心をつないできた何千年の文化の連続が投げ棄てられたのである。このことに徹底して気が付くのに、人類はあとどれくらい時間をかければいいのか⁽⁹⁾。

という悲嘆や懸念を、私もまた覚えざるを得ないのだが、どうだろう。機械や機具に対する異常な依存や過信による人間性の変質、心性の歪み、身体技法(わざ)や感覚などの劣化、退化、喪失を憂慮するのだが、「近代の機械産業」は、さらなる「高品質、高性能、多機能」にして、「簡単で楽だ、便利だ、軽くて安い、省エネだ、使い放題だ」などと謳い、「新発売」の機械によって、「進歩、発展、豊かさ」をもたらすかのように喧伝し、「古くて不便なもの(こと)、面倒臭いこと(もの)」は、すべて改善、解消されるか淘汰され、防止も抑止も可能だという幻想や錯覚、傲慢、自惚れなどの強い「イメージ脳」や「ゲーム脳」⁽¹⁰⁾を肥大させ、矛盾や陥穽にも気づかないように鈍感を促し、悪性の循環を生み出す。私は、機械万能主義や定向進化観の果てにもたらされる依存症や過敏症、人間のモノ化、信頼や信用、規範の頹廃、関係の挫折、孤立化、そして反動や逆襲などを恐れたり、危惧したりするのだが、杞憂に過ぎないことであろうか。たかが「梅干し」のこととどと、一笑に付されるか、一蹴されるまでのことなのであるか。「文化の安全保障」としても、ぜひ一考を願いたい。

今や、多くの機械や器具に囲まれ、便利で豊かだという生活を享受しながら、「物と心をつないできた何千年の文化の連続」を断絶させ

るような解体や分散に加え、細分化、個別化、差異化を推進するようなことばかりが目につく。だから、必然的に生じている不均衡や不調和などの弊害に苦しみ、挫折を恐れながら、変だな、不自然だな、嫌だなと承知のうえで強いられ、追従しているような状況に思われてならない。「よくなるだろう」「よくしてくれるであろう」と期待する他律的な「進歩観」には際限がないので、危険や被害も増大するばかりである。それでも迎合したがる要因は、機械が無かったり少なかつたり、「不便だった」という時代や社会、そして人は「遅れていた」のだから、「進歩した」今日の参考にならない、値しない、とばかりに省みない進歩至上主義史（私）観の蔓延であり、傲慢な偏見である。つまり、すべてが「進歩した」という思い込みに基づき、「最新の情報」だという現象や事象の氾濫に煽動され、「イメージ脳」や「ゲーム脳」づくりを余儀なくされ、慢心になっているからである。それでも心ある人々によって歴史という教訓、伝統や文化という教材、民俗という手本、先人という鑑かがみなどを携え、「温故知新」の真意を繙きながら今日に至ったのである。だから私たちの心のなかには「古いもの」が宿り、暮らしのなかにも「古いもの」が息づいている、ということをお忘れはならない。

温故知新—— だからなのかも知れないが、私は「年寄りと味噌漬けは、すぐにはできない」という家郷（岩手県一関市花泉町）の伝承（諺）を思い出すが、「梅」一つ、「梅干し」一粒とてすぐにはできない、という事実を承知すべきである。「梅」は、「天地」と共に慈し

みながら育て、「天地」の恵みである、ということにも思いを致すべきであろう。だから無機質なモノを作り続けることによって生じる精神とは、必然的に異なる。身の回りの生きもの、が無常迅速の時を痛感させるのだから、「お互い様」とばかりに自らの哀れを知り、命を愛惜する心情や感覚を紡ぎ、連綿と継承されて来た命の尊厳を認識し、古典的な教養を培うのである。即ち、「農婦われ」は、「梅漬けの時季」や「梅」の実際の生感を熟知し、不文律の「土の香」や「光と露をふふむ紫蘇の葉」を肌で知り（身体感覚）、同化融合によって味わいも熟成されるのである。いずれも天と地と、そして人との一体化が「梅干し」づくり、「梅干し漬け」の秘訣であり、「梅」を包む自然と交感する心情こそが教養の神髄なのである。だが、現状は実学優先の学力向上流行りで、景気回復のためにモノの購入に寄与すべく人材の育成なのか、知識の伝達と獲得競争に追われているように見える。だからこそ、意図的に編纂された「検定済教科書」を用いての「座学講義」による勉学の機会以上に、春夏秋冬の彩りに満ちた身の回りの自然を教材とした「路上教授」の時間を増やし、継承されてきた古典を繙き、洗練された伝統や文化と触れ合いながら、教養の醸成や回復を目指すことが急務なのではないか、と言いたい。そのためにも先人の人生に学ぶことであろう。

「和歌を紡いで五十年」の佐藤正子さんは、嫁いで「農婦われ」の道に努めて七十年に近い（嫁ぐまでは、碓氷郡松井田町国民学校の教員）。この間の喜怒哀楽を三十一文字（短歌の別称）に託し、凝縮さ

せながらうたい続けて来た。自らが「私の百姓の歌は、世に問うほどのことはないとは思ふものの、読み返してみると、生ける証し、生活の記録として、聊かの感慨なきにしもあらず。」と言ひ、「思えば、戦争の食糧難が、私を農婦に仕立てたのであるが、歌の基礎もなく、唯、百姓として肉体労働の傍ら、むさぼる様に詠んだものばかり。それでも、それは私にとって、日々の喜び哀しみであり、他郷へ嫁いだ孤独の心の慰めでもあって、これらの私の分身でもあるもろもろの歌を捨てるに忍びない。それならば、いつそ、生き甲斐の証として、又、〈短歌の自分史〉として皆ぶち込み、恥を晒そうと決め、こんなごたごたしたものになってしまった。」と、「あとがき」のなかに綴っている。いずれもその通りであろう。それでも、そこには筆舌に尽くしがたいほどの万感の思いや、伝えずにはいられない真情が、紙面いっぱい溢れており、切ないまでの真意を読み取るほどに感傷的になり、ほのぼのとした温もりを覚えるのは、決して私だけではないだろう。

さらに佐藤正子さんの真情を伺ってみた。そこには自重ぎみに、かつ気後れしたかのように、「お他人様には、数首で飽きてしまつて、到底終わりまでお読み頂けないことは、承知の上であるが、」とも続けているのだが、人の一生は多くの人との関わり合いによつて始まり、人生という物語もまた、多くの人との出会いや関わり合いに伴う「相逢」のときを経て創造される。だから、歌人として生まれて来る人も、生まれたときから妻や、母と呼ばれる人もいない。歳月を重ねた後に、「子をもつて知る親の恩」「這えば立て、立てば歩めの親心」

「寝ていても団扇の動く親心」「よく寝れば寝るととのぞく枕かや」などという教訓や川柳、戯れ歌を思い出すまでもなく、佐藤正子さんもまた、自らが親にして「親」を恋しがること子に如かず、である。真に「親思う心にまさる親心今日のおとづれ何と聞くらむ」(吉田松蔭)ではないが、「子を見ること親に如かず」と、思はずにはいられない。次のような一首は「母」を恋ゆる絶唱である。

風呂敷に紐足して結び笥を負ひ来し母の姿忘れじ

「母」は、遠い他郷に嫁いだ吾が娘を、心配なあまりに訪ねて来たのである。その時の土産にと、自家の裏山あたりの竹藪のなかからか、出かける前に掘り出したのもあろうか、不揃いとは言え笥を得た「笥」を数本、風呂敷に包んだのであろうが、大きいのもあれば長いのもあつて包みきれなかつたのであろう。あるいは背負うために、明らかにそれと分かる「紐足して」包み、結わえ、背なかに「負ひ」、遠路を徒歩であろうか、はるばる訪ねて来られた「母の姿」を見た瞬間、それまでの緊張感や心細さが一気に緩み、切なさのために感泣したことであろう。

吾が娘との久しぶりの再会は、「母」もまた愛しさを忘れなかつたであろう。親と娘——二人は、やはり娘として、妻として、母として、同じ道を歩いている、という共感も伏流水のようにあつたであろう。遙かな古代だという大和や奈良時代の親も、「瓜食めば子等思

ほゆ 粟食めばまして思ばゆ いくより来たりしものぞ眼交ひに
もとな懸かりて安眠し寝さぬ」とか、「銀も金も玉も何せむに 勝れ
る宝 子に及かめやも(い)ずれも山上憶良。『万葉集』巻五・八〇二、八
〇三) という「和歌」を思い出しながら、いつの日から、誰が言い始
めたのか、「子は三界の首枷」「子に迷う親心」「子の命は親の命」「子
に過ぎたる宝なし」「子をもては七十五度泣く」「親の心子知らず」な
どと、親子の宿命に関わる霊妙な教訓や箴言を語り継いできた人々の
思いに思いを重ね、新たな思いに目頭を熱くした次第である。

(五) 「御蔭様」の精神—— 結びに代えて

母と娘の再会は、吾妻の山里に無常の時は流れても、確かな記憶の
なかに刻まれたことであろう。その日、佐藤正子さんの「母」は、「子
に引かれるは親の因果」「子に引かされる後ろ髪」などという諺にも
ある通り、未練を残しながらも辞去し、再び遠い家路を辿って行つた
ことであろう。母との別れ—— それは娘との別れでもある。別れ
の悲しみは自愛の目覚めであり、相手への慈しみでもある。涙は決し
て悲しみのためだけに流れるのではない。新たな決意や奮起をも促す
のである。佐藤正子さんは「母」との別れの悲しみを通して、人生の
機微や神秘、愛憎、無常などを知り、果たして「和歌」詠みとしての
心や教養を深め、「和歌」の道を極めて来られたのである。その道は
「農婦われ」と共にあり、「和歌」は其生の所産である。だから一二八

〇余首にも及ぶ『歌集 詠はめや 草屋住まひ』は、「嫁とし姑とし
て、また、妻や母や女としての半世紀余に及ぶ哀歎を、短歌にこと寄
せて活字に残したい！ 平凡ではあるが、家事と農業一筋に生きて来
た忍耐の心を、子どもや孫に語り継ぎたい！ そんな衝動に駆られて」
の告白であり、実現である。だから、『歌集』には人生の哀歎を生み
出す人間関係や、人情の機微に加え、農林業という暮らしの歴史や時
世、実態などが反映されている。自らが「農婦われ」として生業に勤
しみ、「求道」に徹して来た真摯で、ひたむきな姿勢から創出された、
絶唱の数々が収められている。読む人との共感のもとより、感動を共
有するに至り、共に歩むことになるであろう「相逢」のときを得られ
るに違いない。それは「精霊」が宿るという言葉を生かしている和歌
の力であり、和歌を紡いで五十年—— にもなる、佐藤正子さんの
人間性や教養の必然であり、結実である。それはまた、佐藤正子さん
の人徳を証左するものであり、純情な利他愛を注ぎ込むような、素朴
な「御蔭様」精神の結晶である。天と地を「詠はめや」と和歌を紡ぎ
続けて五十年、真の求道者に終わりはない。

(ちば みつぎ・高崎経済大学地域政策学部教授)

〔注〕

- (1) 唐木順三『詩と死』(文藝春秋社) 一九九頁。
- (2) 中西進『神々と人間』(講談社現代新書) 四八頁などを参照。
- (3) 新村出編『広辞苑 第四版』(岩波書店) 一〇九五頁。
- (4) 「可惜」は、「勿体ない」「残念だ」などという意味で『万葉集』巻の第九、一六九三
(よみ人しらず) や、西行の『山家集』でも用いられており、『方丈記』の作者・
鴨長明も、「いかが要なき業しみを述べて、あたら時を過ごさむ」と、終章に書

き添えている。「可惜」の語源に関する説明や、「あたら才能なのになあ」「可惜もんだなあ」などと、名詞を修飾する副詞的な用法を含めた詳細については、小著『可惜 命の文学』（双文社出版、一九九一年十二月五日刊）などを参照して戴ければ有り難い。

- (5) 注3に同じ。一九七四頁。
- (6) 「結論」の終わりに、「畢竟ここには宮澤賢治一九二六年のその考があるのみである」と記した。「農民芸術概論綱要」のなかの「序論」や「結論」から引用した。
- (7) 本居宣長（村岡典嗣校訂）『うひ山ふみ鈴屋答問録』（岩波文庫）二五頁。
- (8) 前田英樹『独学の精神』（ちくま新書）一四二頁。
- (9) 注8に同じ。一四三頁。
- (10) 『読売新聞』が「読書していますか」というシリーズの一回目と三回目、「文章書けない学生」「キレやすい『ゲーム脳』」という見出しを掲げ、事例の紹介にとどまらず、詳細な分析を加えて報じていた。同紙の平成十四（二〇〇二）年十月十一日（金曜日）、同十三日（日曜日）。いずれも朝刊。
- (11) 佐藤正子『歌集 詠はめや 草屋住まひ』（上毛新聞社）のなかの「あどがき」より引用。二七一～二七二頁。
- (12) 注11に同じ。二七二頁。

附記 今回、この小考をものするにあたり、佐藤正子さんに関する「和歌」以外の詳細については、佐藤正子さん自筆の私製「佐藤正子〈年譜〉覚え書」より引用した。そこで佐藤正子さんの実績を証左する受賞歴や、活動の一端を紹介したい（順不同）。

短歌同人誌（全国版）『黄金花』による「全国黄金花」短歌賞、群馬県歌人クラブ会長賞、群馬県文学賞（短歌部門）、日本歌人クラブ選者賞・秀作賞、NHK全国短歌大会・特選賞、上毛文学賞（短歌部門、佳作）、村上鬼城賞（佳作、5回）、群馬県現代俳句大賞、群馬県俳句協会知事賞、現代俳句全国大会準優勝、そしてまた「NHK歌壇」にて入選歌の全国放映40回を数える、などに加え、各種の短歌会、句会、吟行会などにおいても入賞、入選、表彰の栄誉に輝き、多数に及んでいる。いずれも永年の精進や研鑽の成果であり、体得された教養の具現であろう。そして、「継続は力なり」「雨だれ石を穿つ」の通りで、地道な創作歴や、「和歌」の道をひたむきに歩んで来られた真摯な姿勢の評価でもあろう。

また、「二〇〇六年度 表現学会 全国大会」（平成十八年六月三日、四日。於・高崎経済大学）では、第一日目の午後、「息づいている草屋暮らしの言葉」と題して記念講演を行った。創作の礎であり現場である、言葉を育む暮らしぶりや不断の心がけなどについて、写真や民具を用いながら熱心に紹介された。またしても「性、相近し。習、相遠し」（生まれながらの素質には、それほどの違いや差があるわけではない。その後の学習や習慣によって大きな違いや差がつくものである。

『論語』の「陽貨篇」や、「習い性と成る」（『書経』）という教えと共に、「艱難、汝を玉にす」という言葉を思い出す。だから、こうして人や古典に学ぶことが多いということである。

（平成二十一年五月八日 謹識）